2016.4.19

博物館 Dictionary No.189

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

―特別展覧会「禅 ―心をかたちに―」―

禅の「先生」を描く
陳賢筆列祖図（萬福寺蔵）

みなさんの学校の校長室には、これまで校長先生をつとめてきた先生たちの写真が飾られていませんか。歴史の古い学校ほど、多くの先生の写真が並べられており、優しかった先生も威厳のある姿で写っているので、校長室に入るとなんとなく緊張しますね。今回の展覧会は仏教のなかの「禅宗」という宗派にかかわる文化財を展示していますが、ここで紹介する「列祖図」は、簡単にいえば、禅の「先生」たちの姿を描いた肖像画を収めた冊子です。

図１　釈迦如来像

「列祖図」の「列祖」とは歴代の祖師という意味で、「祖師」は宗派を開いた高僧のことです。日本の禅宗には主に臨済宗、黄檗宗、曹洞宗などの宗派があります。仏教はインドで始まりましたが、三宗派とも中国で生み出されたもので、鎌倉時代から江戸時代にかけて日本に伝えられました。この「列祖図」は黄檗宗の総本山である京都・宇治の萬福寺が所蔵しています。中国で明から清に王朝が変わるころ、明朝の元号で永暦八年、清朝の元号では順治十一年にあたる1654年に中国南部の福建省の泉州あたりで、陳賢（生没年未詳）という黄檗僧が描いた画冊です。

それでは、どのような祖師たちが描かれているのでしょうか。

第一祖の摩訶迦葉から第三十三祖の慧能まで三十三人、「西天東土」、すなわちインドと中国の三十三祖が世代順に並べられています。ただし、冒頭の黄檗宗開祖の隠元隆琦（1592～1673）の題字と序文につづいて描かれているのは釈迦如来（図１）です。みなさんご存知の「お釈迦さま」で、仏さまとして崇拝されますが、紀元前五世紀ごろに北インドで仏教を初めて説いた実在の人物です。次には釈迦の脇侍にあたる文殊、普賢菩薩が、さらに観音、勢至菩薩がつづきますが、四菩薩は実在の人物というわけではありません。

図２　第一祖 摩訶迦葉像

第六図になって始めて、第一祖の摩訶迦葉（図２）が登

場します。摩訶迦葉は釈迦の弟子で、釈迦が入滅した後に教団を率いて、仏教の教義を整理した人物です。第二祖の阿難も釈迦の弟子で、摩訶迦葉とともに十大弟子に数えられています。以下、第二十八祖の達磨までインドの祖師がつづきます。

第二十八祖の達磨（図3）は禅宗の開祖（禅宗では第一祖）であり、最も尊敬を集める祖師です。五世紀後半から六世紀前半のインド人僧で、南北朝時代の中国にやってきました。赤い置物で知られる「達磨さん」は壁に向き合って坐禅すること九年、手足がなくなってしまったという伝説を表した縁起物です。第二十九祖（禅の第二祖）の慧可（487～593）からは中国の祖師で、第三十祖（禅の第三祖）の僧璨（？～606）、第三十一祖（禅の第四祖の道信（580～651）、第三十二祖（禅の第五祖）の弘忍（601～674）、そして第三十三祖（禅の第六祖）で唐時代の慧能（638～713）（図4）で終わります。

図3　第二十八祖 達磨像

自分の内面に向き合って修行する禅宗では、師は悟りに達するまでの手がかりを与えてくれる「先生」です。列祖は師（先生）から弟子へ、その弟子が師となり次の世代の弟子に禅の教えを伝えます。達磨以下、禅の六祖はそれぞれ師と弟子の関係です。人から人へ教えを受け継ぐその様子は、いまの学校と同じといってもいいかもしれません。

さて、祖師たちはどのように描かれているのでしょうか。第一図の釈迦のみが蓮華座に坐した正面像で、それ以外は斜め横からの全身像で描かれています。第十三祖の迦毘摩羅が龍を従えたり、第二十四祖の師子が獅子を抱いたりするのは例外で、そのほかの祖師たちは円座や菰のうえに坐しただけの簡単な描写です。霊験あらたかな奇抜な姿で描かれているのではなく、あくまで生身の人物としての姿が強調されているわけです。そのため、祖師の描写はこれまでの中国絵画とは違った、陰影による隈取りで、身体の立体感が表現されています。この展覧会では禅の六祖を描いた鎌倉時代の「六代祖師像」（重要文化財、妙心寺蔵）も展示されています。こちらも中国絵画をもとに描かれた肖像画ですが、「列祖図」とは趣がちがいます。

図4　第三十三祖 慧能像

宗教といえば、仏教のほかにキリスト教やイスラム教が世界の三大宗教として知られています。近年では、宗教の違いからさまざまな争いが絶えませんが、こういう時期にこそ、人と人のつながりを大切にする禅宗の教えをいま一度、見直してみるものいいのかもしれませんね。

（美術室　呉 孟晋）

印刷・富士印刷社